

中東レポート

第 77 号

発行 ウニタ書舗
 東京都千代田区神田神保町1-52
 TEL.(03)3291-5533
 編集 J.R.A.
 郵便振替 東京1-48443
 三菱銀行神保町支店 当座9012656
 会員制 年会費2400円

目次

人民の闘いの拡大、新たな様相を示す中東情勢 1

資料 6

・入植地建設との対決の呼びかけ

・PFLP政治局の政治声明

・三面派・アメリカ人

・実りのない二国間交渉

・土地の日一周年にあたって

重要日誌（一九九二年二月一一日） 15

（三月一〇日） 15

人民の闘いの拡大、 新たな様相を示す中東情勢

一九九二年三月一〇日

シオニストにとって、ショッキングなことが連続している。

三月四日、イスラエルの警察相は、二月一五日未明に発生したガレドの軍訓練基地攻撃の犯人として、「四八年領内のイスラエル・アラブ

人四人を逮捕した。四人はイスラミック・ジ

ハーダのメンバーである」旨の発表を行った。

同日、PLO支持者が圧倒的に強いと言われていた西岸ラマラの商業会議所理事選挙で、和平反対、全土解放を掲げるハマス系が圧勝した。三月七日には、アンカラのイスラエル大使館の爆破に加え、ヒズバラー書記長A・ムサウイ師らの虐殺、それに続く侵略行動の拡大をもって、

イスラエル軍の面子を保とうと策した。だが、「カチューシャを沈黙させようとするイスラエルの努力は空しかつた」（ニューズ・ウイーク誌三月二日号）だけではなく、逆に、レバノン、パレスチナ全勢力による結束と闘いの強化、拡大、人民の士気の高揚を作り出している。

対外的には一〇〇億ドル信用供与問題、内にあってはリクード党内矛盾の拡大など、シャミール政権は危機の淵に立たされているが、それを作り出してきた根本の力は、もちろん、再び高揚し、統一性を回復しつつある人民の闘いにある。

今号では、その人民の闘いに焦点を当ててみたい。

一 ガレド軍事基地攻撃—レバノン南部の闘い—インティファーダ

二月一五日未明、ナイフ、斧、農作業用フオークで武装した四人（？）が四八年領内のイスラ

ダと四八年領内のパレスチナ人民へも、それは伝わり、呼応するものとなつてゐる。イスラエル当局は、三月四日の逮捕発表以降、「イスラミック・ジハード」原理主義者が問題なのであって、アラブ人一般が問題なのではないことを強調し、（ユダヤ人、パレスチナ人双方の）対立感情を逆撫でしたり、パレスチナ人内における共感の拡大を阻止しようと策を弄している。

すでに、二月一二日、四八年領内パレスチナ人町村の指導者たちが、シャローンのアラブ町村破壊策動＝大量のユダヤ人入植地建設政策（それはとりもなおさずパレスチナ人の土地の「合法」非合法を問わない接收を意味している）の推進に對して、「これはわれわれの町村に死刑宣告するに等しい」という抗議の声を發していた。國際的にも、またパレスチナ代表団自身においても、西岸、ガザなどの六七年被占領地での入植活動や弾圧政策などには非難の声を挙げても、四八年領内の入植活動やパレスチナ人の苦境にはほとんど触れようとしない現状にある。八九年二月のイスラエル地方選挙で、「アラブ」町村において「原理主義者」が飛躍的に伸張したのは、インティファーダの影響に加えて、こうしたPLOのあり方とも密接に関連している。さらに言えば、レバノン、シリア、ヨルダンなどのパレスチナ人キャンプでは、和平反対もしくは帝国主義的解決反対の気運が圧倒的である。そうなるのも、ほどんどが四八年領

二 種平交渉は何を産み出しているか

内の出身者であり、彼らなどては現状の固定化を意味するに等しいからである。

イスラエル当局は、八五年の時点で、パレスチナ人の間から新しい型の攻撃（主要にナイフなどの使用）の拡大に手を焼いていることを自白していた。それがインティファーダへと発展していくたのだが、四八年領内からは連帯のスト、デモなどは数多くあつても、西岸、ガザとは一線を画した行動形態となつており、イスラエル当局をして安心させていたし、「飛び火」しないよういろいろな策を弄してきていた。アレンズが「PLOアラファ特派の仕業」と決めつけたのにも、同様の政治的配慮も伺える。だが、ガレド攻撃の結果はシャミール政権が最も恐れるものであった。その独創的で勇敢な闘いは、インティファーダや南部の闘いと結びあい、相互に鼓舞しあつて、シャミール政権を窮地に追い詰めている。

捕——そこにはわが団員も含まれている——
パレスチナの土地の接收、レバノンの難民キヤンプへの空爆など、多くのイスラエルの動向があり、そのすべてが和平過程に障害を作り出している、「われわれはこうした困難点を克服する方途を探ってきた。唯一の方途はそうしたこととのすべてをイスラエルに停止させることと考える。(そのためにも)パレスチナ代表団のアシマンへの出発を停止する。その最終決定はわがパレスチナ指導部から発せられる」と発表した。
ムサウイ師の虐殺や南部への侵略行動と相まって、アラブ側のボイコットを予測する論調が強かつた。が、一九日、カドゥミ氏はダマスカラ訪問の最終過程で、「われわれは世界にイスラエルのみが和平を危険にし、地域内で緊張を作り出していることを証明するため、和平過程を続ける」と、和平つぶしのあらゆる策動を展開しているシャミールの手に乗らないことを宣言し、パレスチナ代表団は出発の途に着いた。
レバノンのブエズ外相も二〇日、「イスラエル侵略者によるレバノン領土の侵害はわれわれを和平過程の外に置く(=ボイコットを言わせる)ためのものである」と対応し、ファドラツラーラー師も二一日、「イスラム勢力はA・ムサウイ師の犠牲の後、自己防衛を回復した」、「今や敵は敗北し撤退させられた。もはや、カチューシャを(ガリリーに)放つ必要はなくなった」とレジスタンス活動をレバノン内に限定するよう呼びかけ、交渉団との連携した闘いを展開

エリ軍訓練基地を襲撃した。多くの兵は休暇で不在、残っていた者たちは皆眠っていた。決行主体は、一つのテントを襲い、三人を殺しもう一人に重傷を負わせ、四丁の小銃を奪って逃亡した。

敵は動搖を隠せず、「こんなことは西岸、ガザでは決してありえない」、「前代未聞の失態」などと騒いだ。だが、八七年一月、インティファーダの引き金になつた鬭いとも言われていて、PFLP-GC（総司令部派）によるキビヤ作戦の際にも、未確認飛行物体故の警戒体制指令が出ていたにもかかわらず、兵たちはサロンに集まつてTVを見ていて、作戦主体の基地内への侵入攻撃を容易にし、その戦果を大きくさせたのを忘れたわけではあるまい。

そうした自らの動搖と失態を隠蔽するため、シャミールの右腕、戦争相アレンスは「アラファートが（攻撃の）背後にいる」、「和平を妨害する目的で行つた」、「こうした攻撃を遂行したテロ組織はヨルダンにベースを置き、テロ活動の手引きはヨルダンから行われた」などとPLOとアラファート議長を非難し、例によつて、あたかも自分たちが眞に和平を求めているかのような虚言を繰り返した。

これに對してPLOは、「それ（を実行したのは）パレスチナ市民である。だが、それは占領への正当な抵抗である」と反論し、F・フセイニ氏も「イスラエルはレバノンやその他で軍事行動を展開している。（だが）彼らはそれが和平を妨害するとは言わない。それなら他方の

側も同様のことをできるというわけだ」と、狼狽するアレンスの非論理性を叩いた。また、アレンスから実行主体として名指されたジェニンのブラック・パンサー・グループは一七日、三イストラエル兵殺しの責任を「引き受ける旨」発表したうえ、「ムサウイ師暗殺への反撃として同様の攻撃を遂行することを辞さない」と英雄的闘いを引き継ぎ、レバノン南部の闘いと呼応した闘いを強化することを明示した。そして一二日、ジェニン地区の石油貯蔵所で、ガードママンを殺し、その銃を奪取するという闘いが展開された（敵はブラック・パンサーの仕業と決めつけ、弾圧を展開している）。

アイネヘルワ、ラシャディーエのパレスチナ・キャンプ二カ所への空爆、ヒズバラー書記長A・ムサウイ師らの虐殺、国連軍管理地域内の二つの村への侵略や南部各地への空爆、砲撃などのイスラエルの侵略行動は、逆に人民の怒りを大きくしただけであった。レバノン南部では、ヒズバラーだけでなく、アマルや共産党などの民族主義勢力そしてパレスチナ各勢力の共同した反撃行動が展開され、戦線の統一が飛躍的に強化された。

ベイルート郊外やバールベックで行われたムサウイ師の葬式には、諸組織の代表の参加に加えて、イラン、シリア、レバノンの政府代表が参加し、人民は「アメリカとイスラエルに死を！」の叫びを繰り返した。ヒズバラーの南部代表カーセム師は、「われわれとイスラエルとの闘いは今や大きく開かれた」、「われわれはシオ

ニストの足下から地震を作り出す」、「イスラエルは自らの手で墓穴を掘った」と闘いの意志を表明した。新しく書記長に選出されたナスマツラーハー師は、「われわれは闘い続ける」、「われわれは戦争がイスラエルとの間の唯一の言葉であるとユダヤ人に告げる」と宣言した。また、国民党の精神的指導者といわれるファドラッラー師も、「レジスタンスの攻撃のみが民族を正しい方向へと導く」と表現した。

八二年のレバノン侵略は、PLOの弱体化というシオニスト・ベギンの目的の一部において一定の成果を見たものの、レバノン一パレスチナ人民の共同した闘いを質量ともに高め、泥沼状況に陥ったイスラエル軍はみじめな撤退を全儀なくされた。そうした人民の高揚は、単にレバノン戦線で起つただけではなく、パレスチナ人民の闘い、インティファーダへと継続していく。そうした苦い経験が身に染みているがゆえに、参謀長のバラクはレバノンへの地上進攻に躊躇を示したと言われている。そんなお家の事情もあって、イスラエル軍は「目的を達した」と嘘ぶいて撤退した。シャミール政権の目的は「カチューシャを沈黙させる」ことにあつたのではなく、自らの動搖を隠し、イスラエル軍の「強さ」を誇示し、政府、軍そしてユダヤ人のショックをやわらげ、自己満足的な安心感を作り出すことにあつた。

する方途を指し示した。

アメリカ帝国主義は、ムサヴィ師虐殺の直後、八七年以来のレバノンへの渡航禁止を再強調し、在レバノン大使を帰国させ、欧洲、アフリカ、中東地域の米国人に誘拐、テロなどの警告を発した。シリアを引き続きテロ支援国と見なす規定を変えず、さらには、レバノン政府からの安保理への提訴に対し、同理事会での「討議」決議は和平過程に影響を与える」なる屁理屈をもつて、「すべての当事者に……最大級の自制を行うよう呼びかける」なる議長（＝米国大使）声明をもってお茶を濁した（アメリカ帝国主義のイラクやリビアへの対応との大きな落差は、アラブ人民の怒りをいつそう大きくさせただけである）。

しかし、和平過程は、シオニストだけでなく、アメリカ帝国主義のイスラエル擁護にも足枷をはめることになつていて。すでに、在米ユダヤ社会や親イスラエル組織からもシャミール政権のあり方とアメリカ帝国主義の援助のあり方に批判の声が強くなつておる、議会内でも「イスラエルの入植政策が変らないかぎり、（米国援助を）どのように使うか」という（イスラエル政府の）保証書をいくら受け取つても、紙屑の山を作るもの」（上院歳出委員長）という現状に至つていて。米国内におけるイスラエルのスペイ問題、イスラエル当局による古代絵巻出版禁止やビル・ゼイト大学の米人教授（古代芸術）暗殺などの影響もあるが、人民の鬭いがそつした動きを促進している。シ

流があるが、大別すれば、イラン革命の影響を受け、イランとの関係が強い潮流、モスレム同胞団の流れを汲み、サウジアラビアなどの反動政権の支援を受けてきた潮流（これは湾岸戦争を契機に分岐してきている）、そして少數ながら独自の潮流ということになろう。

イラン系の代表的存在はシーア派を基盤とするヒズバラである。新書記長ナスマラッラー師は、南部のシーア派村の出身で、最初にイラク南部のアル＝ナジャフ市で、後にイランのコム市でモスレム教理を学び、八二年のヒズバラ創設に寄与した一人である。師の経歴に示されるように、ヒズバラはシーア派が軸であるところから、イラン革命、ホメイニ師の強い影響を受けている。当初、アマルの一部として活動していたが、八二年イスラエルの侵略に対する闘いのなか、イランの革命防衛隊の支援を受け、独自の党派として創られ、レジスタンスのなかで勢力を拡大してきている。

地域は異なるが、今やはり注目をひいているアルジェリアのF.I.S（イスラム救国戦線）は元来、反共反FLN（民族解放戦線）色が強く、サウジアラビアの支援を受け（アフガニスタンの反共ゲリラに義勇兵を送つたりして）、それが湾岸戦争で外国軍の招じ入れに反対してサウジアラビア離れをし、現在イランとの結びつきの方が強くなっている。サウジアラビアが、そしてアメリカ帝国主義を筆頭とする西側がブデイアフ政権を支援するのは、F.I.Sが原理主義だからといつよりも、イランとの関係が強い

からである。

旧ソ連内のモスレム諸国への働きかけがいろいろな国から行われているが、注目をひいているのがイラン、サウジアラビア、トルコである。アメリカ帝国主義は、ここでもイランの影響力の拡大を恐れ、民族的血縁関係にあるトルコをたて、サウジアラビアに金を出させて、それを阻止しようとして策している。

スンニ派の原理主義諸組織にあつては、シーア派が圧倒的に多いイランとの結びつきはそれほど強くなかった。しかし、湾岸戦争はF.I.Sに限らず、スンニ派、とりわけサウジアラビア系に大きな亀裂を創ることになった。サウジアラビアの国王は、八六年以降、モスレムの「聖都の守護者」なる肩書きを名乗つてゐる。これを名乗つたのは、七九年の独立系潮流によるカーバ神殿攻撃やイランの影響力の拡大が同國內であり、それへの対抗措置であった。その当人が同国内に異教徒の軍隊を招き入れた。原理主義者にとって、というよりもイスラム教徒にとって、それはまさに裏切り行為にも等しいことであった。アフガニスタンのゲリラの一部がサウジアラビアに義勇兵を出したが、それが反共「聖戦」で統一していたモスレム勢力内の矛盾を深めたのは当然と言えよう。

八一年一〇月にサダトの暗殺を敢行したエジプトの原理主義者は同胞団であり、パレスチナのハマスやイスラミック・ジハードと同じ流れを有しているという。彼らはサウジアラビアよりも、サウド家によってアラビア半島から追い

ヤミール政権が、いくら「戦略的同盟関係」や「特別な関係性」を騒いでも、その舌の根が乾かないうちにブッシュ政権やいろんな人士に反対を広げせるあり方では、「和平」推進を言つてはいる手前、これまでのようなイスラエル擁護は取れないといふものだ。

エジプトまでが、イスラエルのスペイ摘発を行い、その活動はエジプトに對してだけではなく、アラブの親米政権へのものも含まれていたと発表。半官紙までが「シャミールは首相というランクを持つテロリスト」（アル・アクバル紙）と非難し、さらには米国や西側の対応を非難しだす状況にある。

イスラエル内では、六月二三日の選挙に向けた党首選出で、労働党はラビン、リクードはシャミールと決定した。だが、シャミールはリクード内に新たな内紛の種を撒いた。外相レビとの矛盾の拡大であるが、それは個別レビとの政策上の問題としてだけでなく、欧系ユダヤ（アシユケナジ）と中東系ユダヤ（セファルディ）との矛盾の表現である。そもそも、セファルディはベギンが七七年に労働党のあり方を批判してリクード側へと組み込んだのであるが、選挙名簿作成のリクード党の「大会はエスニック分裂を表面化した」「ベギンはセファルディを召し入れ、シャミールは再び追い出した」とイスラエル内で言われている。もはや、分裂は不可避免で、仮に政治技術的な縫合がなされても、これ

までのよろんな票の流れには決してならない段階に至つてゐる。

それでも、極右＝戦争内閣への批判が強いたころへ、失態とショックの連続である。シリアのティシニリーン紙は「和平はパレスチナ人民の民族的権利の承認とすべての被占領地からの撤退なしには不可能である」「レバノン南部へのイスラエルの侵略は、シャミールの侵略政策を証明した」と非難し、アシユケナジ女史は「入植が続けられ、ブルドーザーがわが大地をひっくり返している。イスラエルは和平過程を葬り去ろうとしている」と評した。アラブ側は、「二国間交渉はそうしたシャミールの姿をより明瞭にし、これ以上「同一円周上で争いを拡大させるあり方では、『和平』推進を言つてはいる手前、これまでのようなイスラエル擁護は取れないといふものだ。

エジプトまでが、イスラエルのスペイ摘発を行い、その活動はエジプトに對してだけではなく、アラブの親米政権へのものも含まれていたと発表。半官紙までが「シャミールは首相というランクを持つテロリスト」（アル・アクバル紙）と非難し、さらには米国や西側の対応を非難しだす状況にある。

イスラエル内では、六月二三日の選挙に向けた党首選出で、労働党はラビン、リクードはシャミールと決定した。だが、シャミールはリクード内に新たな内紛の種を撒いた。外相レビとの矛盾の拡大であるが、それは個別レビとの政策上の問題としてだけでなく、欧系ユダヤ（アシユケナジ）と中東系ユダヤ（セファルディ）との矛盾の表現である。そもそも、セファルディはベギンが七七年に労働党のあり方を批判してリクード側へと組み込んだのであるが、選挙名簿作成のリクード党の「大会はエスニック分裂を表面化した」「ベギンはセファルディを召し入れ、シャミールは再び追い出した」とイスラエル内で言われている。もはや、分裂は不可避免で、仮に政治技術的な縫合がなされても、これ

断をといふシリアの提案に傾いている。

交渉は人民の鬭いと呼應し、敵を孤立させている。カナファーニ女史（シリア報道担当）は、そうした現状を「和平過程はそれ独自のダイナミズムを持つている。交渉の室内でではなく外で、物事を変えていく。われわれはイスラエル代表団との会談でなんら成果をつくれていないが、物事はわれわれの利益へと動いていく」と表現している。

アラブ側は、「二国間交渉はそうしたシャミールの姿をより明瞭にし、これ以上「同一円周上で争いを拡大させるあり方では、『和平』推進を言つてはいる手前、これまでのようなイスラエル擁護は取れないといふものだ。

エジプトまでが、イスラエルのスペイ摘発を行い、その活動はエジプトに對してだけではなく、アラブの親米政権へのものも含まれていたと発表。半官紙までが「シャミールは首相というランクを持つテロリスト」（アル・アクバル紙）と非難し、さらには米国や西側の対応を非難しだす状況にある。

イスラエル内では、六月二三日の選挙に向けた党首選出で、労働党はラビン、リクードはシャミールと決定した。だが、シャミールはリクード内に新たな内紛の種を撒いた。外相レビとの矛盾の拡大であるが、それは個別レビとの政策上の問題としてだけでなく、欧系ユダヤ（アシユケナジ）と中東系ユダヤ（セファルディ）との矛盾の表現である。そもそも、セファルディはベギンが七七年に労働党のあり方を批判してリクード側へと組み込んだのであるが、選挙名簿作成のリクード党の「大会はエスニック分裂を表面化した」「ベギンはセファルディを召し入れ、シャミールは再び追い出した」とイスラエル内で言われている。もはや、分裂は不可避免で、仮に政治技術的な縫合がなされても、これ

断をといふシリアの提案に傾いている。

交渉は人民の鬭いと呼應し、敵を孤立させている。カナファーニ女史（シリア報道担当）は、そうした現状を「和平過程はそれ独自のダイナミズムを持つている。交渉の室内でではなく外で、物事を変えていく。われわれはイスラ

由であるが、政治上では、国際的な社会主義政権の崩壊があり、帝国主義・シオニズムに対し人民が依つて立つところをモスレム原理主義に求める形になっている。同時に、イラン革命の衝撃力とソ連のアフガニスタン進攻があり、パレスチナ内ではPLOの「二つの国家」路線、すなわちイスラエルの存在を認める立場への傾斜が、原理主義に拡大の道を開いている。とりわけ、四八年領内パレスチナ人および四八年難民にとって、全土解放にひきつけるられるのは既述した。そして活動上では、彼らの拠点がモスクにあり、一定合法的な形で組織化活動が可能なことも理由として挙げ得る。ラテンアメリカの「解放の神学」がキリスト教理と人民の現状とを結ぶ形で強い影響力を作り得たのと同様のことが彼らの活動にも言える（原理主義ではないが、リビアのカダフィ大佐らも、熱心な信者を装つて同志の拡大と連絡の場としてモスクを利用し、革命を成功に結びつけた）。

しかし、民族ではなく、宗教、宗派に足場を置き、他の宗教はもちろん、同じモスレムでも違う宗派や考え方に対して時には力でというあり方ゆえに、そして人民の半数を占める女性の役割を評価しないがゆえに、人民を真に統合する勢力としては限界がある。現にキリスト教徒が多く、革命の中で女性が一定の役割を果たしているパレスチナでは、いろいろな矛盾が出ていることを付記するにとどめる。

そういう意味でも、マルクス・レーニンのドグマを当てはめるやり方や外国の権威に依拠するところをここで表明しておく。

われらが人民大衆へ
中東紛争の中心問題たるパレスチナの大義を無視した多国間交渉の開催は、米政権の狙いを改めて浮き彫りにしている。すなわち、われらが大義の清算および他のアラブ問題からの隔絶、二股政策の継続、国際諸決議の棚上げ、アラブ諸政権との関係正常化を通したシオニズム擬制国家の存在の確立である。なお、会議をボイコットし、われらが人民の団結破壊とPLOの排除とを狙つた米国の威しを拒否しているPLOの立場を、われわれが高く評価しているこ

由であるが、政治上では、国際的な社会主義政権の崩壊があり、帝国主義・シオニズムに対し人民が依つて立つところをモスレム原理主義に求める形になっている。同時に、イラン革命の衝撃力とソ連のアフガニスタン進攻があり、パレスチナ内ではPLOの「二つの国家」路線、すなわちイスラエルの存在を認める立場への傾斜が、原理主義に拡大の道を開いている。とりわけ、四八年領内パレスチナ人および四八年難民にとって、全土解放にひきつけるられるのは既述した。そして活動上では、彼らの拠点がモスクにあり、一定合法的な形で組織化活動が可能なことも理由として挙げ得る。ラテンアメリカの「解放の神学」がキリスト教理と人民の現状とを結ぶ形で強い影響力を作り得たのと同様のことが彼らの活動にも言える（原理主義ではないが、リビアのカダフィ大佐らも、熱心な信者を装つて同志の拡大と連絡の場としてモスクを利用し、革命を成功に結びつけた）。

しかし、民族ではなく、宗教、宗派に足場を置き、他の宗教はもちろん、同じモスレムでも違う宗派や考え方に対して時には力でというあり方ゆえに、そして人民の半数を占める女性の役割を評価しないがゆえに、人民を真に統合する勢力としては限界がある。現にキリスト教徒が多く、革命の中で女性が一定の役割を果たしているパレスチナでは、いろいろな矛盾が出ていることを付記するにとどめる。

そういう意味でも、マルクス・レーニンのドグマを当てはめるやり方や外国の権威に依拠する勢力としては限界がある。現にキリスト教徒が多く、革命の中で女性が一定の役割を果たしているパレスチナでは、いろいろな矛盾が出ていることを付記するにとどめる。

同じ日、かつてイギリス占領当局が本部として使用していたキング・デービッド・ホテル爆破やデイル・ヤシン村虐殺などのテロ活動を開いたテロ組織の頭目で、七七年から八三年まで首相を務めたベギンが死んだ。キンシア・デービッド合意の一方の立役者としての「和平過程における歴史的役割」をブッシュは賛美した。だが、「中東の戦争は終わる」と言った本人が、その後、建設中のイラク原発空爆、ゴランの併合（ともに八一年）、レバノンへの侵略（八二年）を行い、テロリストの本性を実証してみせた。サabra、シャティーラの虐殺をはじめとして、パレスチナ、レバノンの人民に対して畜行の限りを尽くしたが、それは人民の怒りとレジスタンスを作り出し、イスラエル軍約六五〇名の死を招き、退陣を余儀なくされた。

戦争内閣の首班シャミールは、今ベギンとともに率いられた行刑当局は、殺人、隔離、ガスによる窒息等をもつての、あらゆる形態の集団懲罰を実施し、筆舌に尽くせぬ不当弾圧をパレスチナ革命の獄中戦士に加えているのだ。UNHCRは、人道的諸組織、法曹諸団体をはじめすべての国際機関に、この虐殺を即刻停止させるよう訴える。同時に、かかる残酷行為を耐えねいきであるが、戦士たちの不屈性を讃え、死へのあらゆる危険に満ちたなかでも、なおいつそうの堅忍さと生存への決意とを示すよう、呼びかける。

UNHCRは、追放決定を受けた一二名のパレスチナ活動家に連帯を示した各国を高く評価するところも、国連安保理決議七二六については、これを歓迎するものの、しかし、この決議をもつては占領当局の畜行、非道が妨げられることがないであろうとの考えを強く抱くがゆえに、同決議の不履行に際しては占領国家に制裁措置をとるよう、呼びかけるものである。そして占領当局の暴虐行為の増加に鑑み、安保理をはじめ、国連総会その他の諸組織に対し、パレスチナ主要都市における恒常的夜間外出禁止令等の諸措置と野放図な入植者の凶悪行為とを停止させること、即ち介入すること、さらには、われらが人民に国際的保護を与えることを呼びかけている。

われらが英雄的人民の息子たちへ
われらが英雄的人民の息子たちへ
占領当局がインティファーダ鎮圧になりぶり構わず取り組みつつある今、われわれは、占領終結に至るまでインティファーダが継続され、むしろ拡大するであろうことを改めて確言する。だがそのための条件を作り出すには、以下の諸点が強調されねばならない。

1、あれやこれやの小異を捨て、民族的團結を維持すること。UNHCRは、善良事務委員会（注・司法委員会に相当する）の郷土全域における樹立達成を求める。同委員会は、将来、諸問題の解決を協調し、基準を統一していくことになる。

■資料■

民族統一指導部—PLO、パレスチナ国による呼びかけ第七九号

入植地建設との対決の呼びかけ

民族統一指導部—PLO、パレスチナ国による呼びかけ第七九号

われらが英雄的人民の息子たちへ
われらが英雄的人民の息子たちへ
占領当局は、既成事実をいつそう積み上げるために、入植地建設に拍車をかけようとしている。われらが人民の未来にとってきわめて危険なこの過程との対決は、その不法性の認識やそれに対する非難を第三者に求めることより以前の、われら自身の責務である。したがってわれらは、われらが労働者に対し、入植地での労働を差し控えるよう求めれる。同時に、民族的諸機関や工場、労働組合に対し、代替職を直ちにこれら労働者に用意するよう求めれる。われらが労働者の愛國心と自らの民族的大義のためには犠牲を厭わぬ覚悟とを確信しているわれらは、こうした要求に彼らが積極的に応じてくれることへの期待を抱いている。

われらが英雄的人民の息子たちへ
われらが英雄的人民の息子たちへ
占領当局がインティファーダ鎮圧になりぶり構わず取り組みつつある今、われわれは、占領終結に至るまでインティファーダが継続され、むしろ拡大するであろうことを改めて確言する。だがそのための条件を作り出すには、以下の諸点が強調されねばならない。

1、あれやこれやの小異を捨て、民族的團結を維持すること。UNHCRは、善良事務委員会（注・司法委員会に相当する）の郷土全域における樹立達成を求める。同委員会は、将来、諸問題の解決を協調し、基準を統一していくことになる。

われらが英雄的人民の息子たちへ
われらが英雄的人民の息子たちへ
占領当局がインティファーダ鎮

ないまま、あっけなく崩壊したのであり、同様のことが米国にも用意されている可能性もあるわけだ。われわれは常に耳目を鋭敏に研ぎすましておかねばならないし、日本やカザフスタン、そして「アジアの虎たち」との関係を強化し、特に中国には特別の注意を払つておかねばならない。プッシュのほかにも世界を支配している力があることを、われわれは確信すべきなのである。

実りのない二国間交渉（抜粋）

マンデー・モーニング誌
九二年三月九日—一五日号

（注・二国間交渉に関する二つの記事から編集部の方で抜粋、再編した）

アラブとイスラエルとの二国間交渉、第四ラウンドは、三月四日、ラマダン（回教暦の断食月）初日に、何らの進展をみないまま、散会となつた。そのわずか二日前、三日間の休会を経てようやく再開されたばかりの会議だつた。

議題の一つは、次回の開催地と開催日だつたが、中東により近い所での開催を求めるイスラエルがワシントンでの開催に反対し、また、時期についても、六月二三日のイスラエル総選挙前の開催日を決めることが期待されていたが、ラマダン中はもとより、ユダヤ教の過ぎ越し祭、キリスト教のイースターが控えている四月も難しい状態だ。

ヨルダンは今回何らの声明もだしていない

ないまま、あっけなく崩壊したのであり、同様のことが米国にも用意されている可能性もあるわけだ。われわれは常に耳目を鋭敏に研ぎすましておかねばならないし、日本やカザフスタン、そして「アジアの虎たち」との関係を強化し、特に中国には特別の注意を払つておかねばならない。プッシュのほかにも世界を支配している力があることを、われわれは確信すべきなのである。

（注・参考）が、国務省に到着したシリア代表団は、進展の見通しについて「悲観的である」とのべた。イスラエル代表団の一人は、「これを、シリアはいつでもそら、と片づけてしまったが、イスラエルー・シリア間の交渉が最も困難を極めていることは、両国の担当官がともに認めていることである。シリアが諸問題の討議の前に、まずゴラン高原を含む占領地からの撤退の確約を求めていたのに対し、イスラエル側は平和条約の交渉にはいらぬ限り、領土問題にかかる検討などいっさい行わないとしている

マドリッド以来、まったく聞く耳を持たぬ者同士での「対話」を続けているのだ。

（注・ヨルダンの交渉団スポーツマンは、「和平過程すべてに通底する原則上において深い不一致が発生し、もしくは存在している」「今回、何らかの進展が……という期待は、失望に転化したという方がいいと私は考える」と発表している。）

一方、イスラエルー・パレスチナ交渉の中心は、二週間前に提出された「平和共存の考え方」と題するイスラエル側提案書をめぐるものとなつた。同文書は占領地での一部行政権力のパレスチナ人への委譲を提案しているものの、七八年のキャンプ・デービッド協定中の自治提案がイスラエル軍の一部撤退を求めていたのに対し、それは触れておらず、また、首相シャミールと当時の国防相ラビンがまとめた「八九年五月提案」と比べても、そこにあつたパレスチナの

に、米国は世界の運命を握る単独の司令部となり、国連は、その力の行使の一形態となつた。難産の末に生まれかわったヨーロッパはまだ弱く、大ドイツの影に脅えて米国の言いなりになつていて。米国に媚び始めた安全保障理事会は、合衆国安保理と呼ぶにふさわしい。だから、米国がイスラムの復活を脅威と感じる限り、皆もそう感じなければならない。結局、米国は民主主義のペイオニアであり、その全世界への伝導者であるというわけだ。もちろん、それは、民主主義が米国に好ましい結果をもたらす限りにおいてである。民主主義がイスラム的色彩を帯びた瞬間、米国は、それを封じ込めるために、いかなる軍事的専制にも、どんな独裁支配にも、祝福を与えるのだ。

さて、戦車一六輌を積んだシリア行きの貨物船は停船命令—臨検を受けざるをえなかつたが、これは、アラブ諸国への武器禁輸措置のためである。中東は、米国の眼には緊張の温床と映つているのだ。だが、米国のだだつ子、米国が中東に植えつけたイバラ、緊張の本来の源泉、イスラエルにこの措置は適用されていない。それどころか、核弾頭や原潜に至る近代兵器の集積や生物・化学兵器の保有すら許されているのだ。さらに、進行中の交渉如何によつては一〇〇億ドル「融資保証」を受けようとしている。

レバノン南部を爆撃し、パレスチナ人を家から追い出し、入植地建設をおし進めていた、この時にである。ヨーロッパも、この「民主主義のペイオニア」の指示に従い、最新型のミラージュ未来を描くのは米国ではなく、創造主である。主はここに當分手綱をゆるめ、米国のか好きなようにさせるかもしれないが、いずれは引き締め、ソ連と同様の凋落が米国に訪れるだろう。

つい最近も、われわれはアジア歴訪のなかでブッシュが卑屈な役を演じたのを目撃している。日本の宮沢との彼の会見は、対等な者同士のものとは思われず、あたかも、米国製品を売りこみにきたセールスマンのそれであった。彼が晩さん会で倒れた時、人々は、経済的流感のせいに違ひないと言つたものだが、実際、この

ユ戦闘機、戦車、潜水艦を獨・英・仏各國で船積みしている。これらの動きが、軍事的不均衡をつくりだし、それによって、アラブを米国に屈服させ、中東を米国製品の大市場へと、また価格操作が可能な石油供給地へと転化することを目的としているのは、言うまでもない。

だが、米国の計画が計算通りに進んでいるわけでもない。米国のペイの独占を認めない鬼つ子たちが現われているのだ。それは新しい経済大国、日本であり、ドイツであり、インドであり、さらには、香港、台湾、韓国、シンガポールといった「アジアの虎たち」である。ヨーロッパも、米国からの乳離れを始めていくところだ。米国内部からも脅威もある。市場の冷え込み、巨大な財政赤字、高い失業率、相次ぐ倒産、そしてドラッグ、エイズ、組織犯罪の蔓延。さらに、それ以上の広がりをみせているのは、六〇〇万をこえるアメリカのブラック・モスリムの間でのイスラム的覚醒である。

未来を描くのは米国ではなく、創造主である。主はここに當分手綱をゆるめ、米国のか好きなようにさせるかもしれないが、いずれは引き締め、ソ連と同様の凋落が米国に訪れるだろう。

つい最近も、われわれはアジア歴訪のなかでブッシュが卑屈な役を演じたのを目撃している。日本の宮沢との彼の会見は、対等な者同士のものとは思われず、あたかも、米国製品を売りこみにきたセールスマンのそれであった。彼が晩さん会で倒れた時、人々は、経済的流感のせいに違ひないと言つたものだが、実際、この

感冒は、かのアジア風邪以上に米国にとつては致命的なものである。日本の後はシンガポールへ向かい、そこでも他の商品を売りこんだのだ

が、結局、手ぶらで帰国せざるをえなかつた。

しなかつたのだ。

米国が歩む指導者への道は決して平坦ではない。

中東のイバラ、イスラエルも、それを植えつけた米国に反旗を翻すだろう。また、イスラムの復活は、アラブ世界ではまだ充分成熟しきれどもないし、権力の座についてもいらないが、人々の心に触れ、その夢をかけてしていくだろう。これは、米国にとっては、他の政府以上に脅威である。

政府とは狡猾なものだが、モスリムは、ナイ

ブではないとしても、善良な人々ではある。だ

から、政治の舞台裏や陰謀などからは離れていていい。中東のイバラ、イスラエルも、それを植えつけた米国に反旗を翻すだろう。また、イスラムの復活は、アラブ世界ではまだ充分成熟しきれどもないし、権力の座についてもいらないが、人々の心に触れ、その夢をかけてしていくだろう。これは、米国にとっては、他の政府以上に脅威である。

ユ戦闘機、戦車、潜水艦を獨・英・仏各國で船

積みしている。これらの動きが、軍事的不均衡



一九七六年、いわゆる四八年ラインのパレスチナ人民はシオニストによる土地の収奪に対し、人民蜂起をもつて立ち上りました。この日を記念する土地の日は、パレスチナ人民の解放への不退転の意志を断固として表明したものでした。そして、この土地の日のたたかいは、現在も続けられているパレスチナ人民蜂起－インティファーダに継承され、どのような弾圧にも怯むことのない人民の革命的抵抗精神と人民蜂起のたたかいは、現在のインティファーダの

土地の日一六周年にあたつて
土地の日一六周年にあたつて、私たち日本赤軍は、以下のように訴えます。

土地の日一六周年にあたる

七八年、八二年の二度にわたるイスラエルの侵略の結果ではないのか」と反問したが、イスラエルは、まったくこれをうけつけなかつたとのことである。

会期終了に際し、シャマスは、こう語つた。

「問題点をはつきりさせよう。イスラエルは、自らが南部レバノンの占領軍となつていることを認めねばならない。これを認めないから、四五への反対といった交渉の基本的障害をつくつてしまふのだ」そして、報道陣には、それで評してこう言つた。「われわれは不一致点を確認した。それが一步前進だ

いわゆる四八年ラインのペレスチナ人民は、中東和平交渉においても、議題にもされないばかりか、その土地は奪い続けられています。土地の日のたたかいは、こうした人民の解放をもとめる叫びとしてありました。四八年ライン内でのペレスチナ人のたたかいも、六七年被占領地でインティファーダに呼応してたたかい続けられています。

なかに生き続けています。解放闘争にとって否定的な現在の国際情勢のなかにおいても、人民の力が唯一の解放への道であることをそれは矢張り続けています。

アメリカ帝国主義は、国際的な世論の動員によって、この人民の解放闘争を抹殺するためには、いわゆる中東和平交渉をアラブ諸国に強制しています。この和平交渉は、パレスチナ人民の民族解放の熱望を実現するものではなく、シオニスト・イスラエルによる占領を合法化し、永続化させるものでしかありません。

しかしながら、アメリカ帝国主義とシオニストにパレスチナは平和をもとめていないという口実を与えないために、この中東和平交渉へのパレスチナの代表の参加は重要なことです。この中東和平交渉がなにものでももたらさないことは、パレスチナ人民自身がよく知っています。土地の日の精神を継承し、五年目にはいったイーティファードの持続と発展はそれを示しています。

は、諸国が政治的には、帝国主義、とりわけ、アメリカ帝国主義に従うことを意味し、経済的には、帝国主義の多国籍資本の餌食となることを要求しているのです。これに反対するものの存在を一掃することを、「正義」の名の下で、露骨に宣言しているのです。アメリカ帝国主義の巨大な軍隊とCIAは、現在もそのために世界各地で公然と隠然と活動を続いているのです。

闘う世界の人民を励ますものとしてあります。そのメッセージは、抑圧された人民は、その解放を実現するまで決して闘争を放棄しないということです。

二、

湾岸戦争以来、アメリカ帝国主義は、国連やその他の国際機関を利用して、世界支配を強化しようとしています。とりわけ、ソ連、東欧の社会主義諸国の崩壊は、帝国主義に国際機関を支配するチャンスを与えました。帝国主義は、これを利用して、民族自決と自立経済を否定する新植民地支配をつくりあげようとしています。帝国主義は、すべての国に対し、「複数政黨制」「市場経済」「自由貿易」を受け入れることを要求し、受け入れない諸国に対する転覆活動を公然と隠然と行っています。湾岸戦争は、まさにその見せしめとしてありました。「民主主義と自由」の名においてのこの要求は、一見、言葉どおりに見えますが、その眞の意図

パレスチナ代表団長、ハイダル・アブデル・フィイは「暫定政府はパレスチナ人の自由な選択権を反映せねばならぬ」、「過渡的段階は、独立宣言へと至るものでなければならない」と語つておられ、パレスチナ側はイスラエル提案を「知性に対する冒瀆である」と一蹴している。

イスラエルは、これまで、行政権力のパレスチナ人への一部委譲が行われる五年間の暫定地位について交渉することを提案してきたが、この計画に、イスラエル軍の撤退も、また一派スチナはもとより、アラブ諸国、米国においても紛糾の種となっている一占領地での入植地建設の停止も含めようとはしていない。ハナン・アシュラウイは、「入植と人権侵害」が停止されるまで、交渉に進展がみられないだろう、と語っている。

パレスチナ代表団は、また、最近ガザで起きたイスラエル兵によるパレスチナ人三名の殺害を非難し、「和平交渉にさらに一つ暗雲を投げかけたとの声明を出した。交渉は成程なくして終わつた。

レバノン——紛糾

は「シリアとのものとは違い、相互理解の雰囲気のなかで進められた」とのことである。

一方、レバノン代表団長、スヘイル・シャマス外務次官は、三月一日の交渉の後、「平和条約は、イスラエルの撤退措置がとられた後に、はじめて可能となるだろう」と語るとともに、ブッシュ米大統領の発言を引用して「平和は交渉の最終目的であり、はじめからそれを得るわけにはいかない」とも語った。彼によれば、「われわれには二つの拘束があり」、「第一のそれは、四二五の履行、第二のは、イスラエルの撤退時期の詳細については、話し合いをもつて決めるとの合意である」「この第二の拘束により、イスラエルは安全保障上の関心事項をはつきりと提起することができるし、われわれもそれを検討していくことになる」しかし「イスラエル側は、これでは（交渉の）出発点が曖昧だとして、こうした提案をうけいれていない」という。

（注・カラミ首相は、今回のイスラエルの南部への侵略の際、「イスラエルはレバノンで二つの目的を持つている。第一に、われわれに対して—A U B爆破、バスターの爆弾、ムサウイ師虐殺などの一テロ行為をもつて交渉に応じさせる」とあり、第二に、南部において新しい「現状」を作り出し、—それを交渉の基本点とすることの強要、すなわち—安保理決議四二五では何もできないようにすることである」とイスラエル非難を行っている。）

南部からの撤退意志を表明するならば、レバノンは真剣にイスラエルの安全保障問題をとり扱うこと、また、安全保障と関係正常化の二つの委員会をつくるというイスラエルの提案を、レバノンが正式に否定したことはないことを認めましたが、ただこの提案については、「イスラエルが執拗に合意を迫っている平和条約の形を変えたもの」とみていることも強調した。
（注・イスラエルは、八二年のレバノン侵略後の占領下でゲマイエル政権に認めさせた八三年の一平和条約」—レバノン国会は批准せず、立消えとなつた、いわゆる五・一七協定—を「理想的なもの」としており、シャールのマドリッド会議発言にもそれは示されている。）
また、レバノンがイスラエルに対し、その撤退を「シリア軍の撤退（問題）とリンクさせないよう」説得努力を行つてきたことを明らかにするとともに、レバノン各地の軍を撤収し、ベカーにのみ再展開するとのシリアの誓約への信頼を表明した。「シリア軍の存在はイスラエルへの脅威となるものではない。それは、レバノン政府（の治安維持）を援助するために必要とされているのだ」
だが、このシリア軍の存在をめぐり、三月三日の交渉が「紛糾した」ことをペイルート各紙は伝えている。それによるとイスラエル側は激しい口調でシリア軍の存在を追及し、ハダスは「イスラエルに対する敵対」とも言ったという。これに対し、シャマスは、「シリア軍の存在は、

浮かれているわけにはいかなくなっています。歴史的な転換は旧ソ連ブロックだけのものではなく、帝国主義もこれまでのあり方を維持できない状態になっています。マネタリストであるブッシュ政権が国内経済政策に専らなれば大統領への再選が困難になっている状況に、それは端的に示されています。また、帝国主義間の闘争が帝国主義の政策の中心となっていることに示されています。

中東においては、湾岸戦争を通して、他の帝国主義の影響力を排除し、アメリカ帝国主義が一元的な支配を確立しています。アメリカ帝国主義は、湾岸産油国の王族に対して、直接的なアメリカの軍事的な存在を承認させ、また、石油供給と石油価格の決定への影響力を確保しました。そして、他のアラブ諸国に対しては、アメリカの要求を受け入れるか、サッダムと連命をともにするかをつきつけることによって、その支配をつくりあげています。

そして、この支配を完成させるために、アメリカ帝国主義は「アラブ－イスラエル紛争」を終わらせる必要としています。すなわち、それはパレスチナ革命をはじめとする帝国主義とシオニズムからの解放をめざすアラブ民族解放闘争を抹殺することを意味しています。これが中東和平交渉のめざすものなのです。

しかし、この一元的支配がいつまでも維持できるものではないことは明確です。帝国主義自身の経済的危機と矛盾の拡大は、一方でアメリカ帝国主義の一元的支配を弱め、他方では新植民地支配をつくりあげています。それが「正義」を認めることを必要としています。すなわち、パレスチナ人民のたたかいを孤立させてはなりません。私たちは、「新世界秩序」とたたかいい、パレスチナ人民のたたかいに連帯し、インティファーダを最後の勝利まで支援していくなければなりません。

現情勢のもとで、世界の人民解放闘争において、もっとも重要な要素は、帝国主義本国における人民のたたかいです。それは、反帝国主義

民地支配の強化が、中東諸国人民の反帝、反シオニズムの意識とたたかいを強めさせています。こうした状況は、世界的な情勢の流れを人にとって有利な方向に変えるものになるでしょう。

三、

現情勢下でのパレスチナ人民のたたかいは、まだ困難な状況にあるといえます。過去、パレスチナ民族解放闘争を含む第三世界の要求に好意的であった国連などの国際機関は、民族解放闘争に反対するようになっています。シオニズムとよび、人種主義以外のなにものでもないシオニズムを人種主義と規定した国連総会決議をとりさげ、国連を排除してアメリカ帝国主義の主導のもとに行われている中東和平会議を追認しています。多くの諸国は、この変化を喜んで受け入れたわけではありません、反対す

ることができます。これが「新世界秩序」であり、これが「正義」なのです。

一九九二年三月三〇日 日本赤軍
重 要 日 誌
一九九二年二月一一日～三月一〇日

二月一一日
・南部、ゲリラ側の爆弾攻撃、一人負傷。
・イスラエル最高裁、パレスチナ商人が提訴して不當課税問題で政府に釈明指示。

二月一一日
・南アフリカ人民の反イスラエル闘争をいつそう激化させるところになる。

二月一八日
・アシュラウイ女史、「代表団員」一名が捕まっている「和平過程は崩壊の淵にある」。フセイニ氏は「代表団のアンマンへの出発を停止する」「最終決定はわが指導部から発せられる」。

二月一九日
・ヒズベラ、新書記長にハッサン・ナスマッラー師選出。師は闘い続けることを強調。

二月二〇日
・アレンス、南部を視察。「レバノン軍に責任がある」「攻撃が続くならイスラエルは南部の生活を不可能にする」。

二月二一日
・南アフリカ人民の反イスラエル闘争をいつそう激化させるところになる。

二月二二日
・南部、イスラエル軍侵略。阻止しようとした国連軍に七名の負傷者（後に「一名死亡」）。レバノン、パレスチナ勢力の共闘強化。ブエズ外相、「侵略はわれわれを和平過程の外に置こうとするもの」と非難し、カラミ首相は「テロ行為をもつて交渉させること、四二五では何もできないようになると」が敵の狙いと非難。

二月二三日
・カドゥミ氏、「イスラエルのみが和平を曖昧にし、緊張を作り出していることを証明するために和平過程を続ける」。

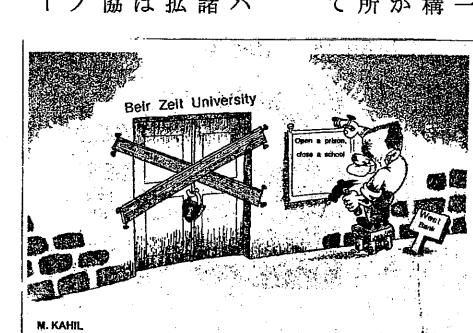
二月二四日
・イスラエル、ムサウイ師暗殺を数ヵ月前に決定、人質交渉のため延期してだと認める。

二月二五日
・エジプト、スペインのアラブ諸國に協力を要請（レバノンのアッサフィー）。

民地支配の強化が、中東諸国人民の反帝、反シオニズムの意識とたたかいを強めさせています。こうした状況は、世界的な情勢の流れを人にとって有利な方向に変えるものになるでしょう。

現在の情勢をつくりだしたのは、私たち帝国主義本国人民のたたかいの立ち遅れによるものであるという自己批判の側から、この状況を突破していくなければなりません。それは、より広範な大衆的なたたかいをはじめとして、あらゆる方法をもって、アメリカ帝国主義と日本帝国主義とたたかい、そして、第三世界人民のたたかいへの連帯を、政治的にだけではなく、物質的にも強化することなのです。

私たち、日本赤軍は、このパレスチナ人民の記念すべき日に、ともにこのたたかいを最後の勝利までたたかい抜くことを強く訴えます。情勢の流れが変わる時が近づいています。歴史的な転換を人民の時代へと発展させるためにともにたたかい抜きましょう。



浮かれているわけにはいかなくなっています。歴史的な転換は旧ソ連ブロックだけのものではなく、帝国主義もこれまでのあり方を維持できません。マネタリストであるブッシュ政権が国内経済政策に専らなれば大統領への再選が困難になっている状況に、それは端的に示されています。また、帝国主義間の闘争が帝国主義の政策の中心となっていることに示されています。

中東においては、湾岸戦争を通して、他の帝国主義の影響力を排除し、アメリカ帝国主義が一元的な支配を確立しています。アメリカ帝国主義は、湾岸産油国の王族に対して、直接的なアメリカの要求を受け入れるか、サッダムと連命をともにするかをつきつけることによって、その支配をつくりあげています。

そして、この支配を完成させるために、アメリカ帝国主義は「アラブ－イスラエル紛争」を終わらせる必要としています。すなわち、それはパレスチナ革命をはじめとする帝国主義とシオニズムからの解放をめざすアラブ民族解放闘争を抹殺することを意味しています。これが中東和平交渉のめざすものなのです。

しかし、この一元的支配がいつまでも維持できるものではないことは明確です。帝国主義自身の経済的危機と矛盾の拡大は、一方でアメリカ帝国主義の一元的支配を弱め、他方では新植民地支配をつくりあげています。それが「正義」を認めることを必要としています。すなわち、パレスチナ人民のたたかいを孤立させてはなりません。私たちは、「新世界秩序」とたたかいい、パレスチナ人民のたたかいに連帯し、インティファーダを最後の勝利まで支援していくなければなりません。

現情勢のもとで、世界の人民解放闘争において、もっとも重要な要素は、帝国主義本国における人民のたたかいです。それは、反帝国主義

民地支配の強化が、中東諸国人民の反帝、反シオニズムの意識とたたかいを強めさせています。こうした状況は、世界的な情勢の流れを人にとって有利な方向に変えるものになるでしょう。

現在の情勢をつくりだしたのは、私たち帝国主義本国人民のたたかいの立ち遅れによるものであるという自己批判の側から、この状況を突破していくなければなりません。それは、より広範な大衆的なたたかいをはじめとして、あらゆる方法をもって、アメリカ帝国主義と日本帝国主義とたたかい、そして、第三世界人民のたたかいへの連帯を、政治的にだけではなく、物質的にも強化することなのです。

私たち、日本赤軍は、このパレスチナ人民の記念すべき日に、ともにこのたたかいを最後の勝利までたたかい抜くことを強く訴えます。情勢の流れが変わる時が近づいています。歴史的な転換を人民の時代へと発展させるためにともにたたかい抜きましょう。

一九九二年三月三〇日 日本赤軍

重 要 日 誌

一九九二年二月一一日～三月一〇日

二月一一日
・南アフリカ人民の反イスラエル闘争をいつそう激化させるところになる。

二月一八日
・アシュラウイ女史、「代表団員」一名が捕まっている「和平過程は崩壊の淵にある」。フセイニ氏は「代表団のアンマンへの出発を停止する」「最終決定はわが指導部から発せられる」。

二月一九日
・ヒズベラ、新書記長にハッサン・ナスマッラー師選出。師は闘い続けることを強調。

二月二〇日
・アレンス、南部を視察。「レバノン軍に責任がある」「攻撃が続くならイスラエルは南部の生活を不可能にする」。

二月二一日
・南アフリカ人民の反イスラエル闘争をいつそう激化させるところになる。

二月二二日
・南部、イスラエル軍侵略。阻止しようとした国連軍に七名の負傷者（後に「一名死亡」）。レバノン、パレスチナ勢力の共闘強化。ブエズ外相、「侵略はわれわれを和平過程の外に置こうとするもの」と非難し、カラミ首相は「テロ行為をもつて交渉させること、四二五では何もできないようになると」が敵の狙いと非難。

二月二三日
・カドゥミ氏、「イスラエルのみが和平を曖昧にし、緊張を作り出していることを証明するために和平過程を続ける」。

二月二四日
・イスラエル、ムサウイ師暗殺を数ヵ月前に決定、人質交渉のため延期してだと認める。

二月二五日
・エジプト、スペインのアラブ諸國に協力を要請（レバノンのアッサフィー）。

・ファドラッラー師、ムサウイ師暗殺は「米国の陰謀が人質釈放後進行し」「イスラエルはその重要な一環を担つた」ものと非難。

二月二六日
・二国間交渉、「われわれは暫定自治に関して……彼らは占領を固めるため」というアシュラウィ女史の発言に代表されるように、溝の深さありあり。またシリアなど一八カ国の国連代表の入ったビルに爆弾、カハネ・チャヤイ名のビラ。

・エジプト、パンナム問題でゲーツが要求したり

ビアへの軍事行動、制裁協力をエジプトは拒否した(レバノンのアッティヤール紙)。

二月二八日
・エジプト、ガーリ氏を殺し宗派対立を煽ることなどエジプト内でのモサド・スペイの目的多数を暴露する記事(アッティヤール紙)。

二月二九日
・ガザ、軍特務による活動家二名射殺から人民の闘い大きく展開される。

・東エルサレム、シャローンの家に火炎ビン。

三月一日
・南部、レジスタンスの作戦(ヒズバラーがイスラエル兵三人殺したと発表)。

・西岸、占領軍はビル・ゼイト大学の閉鎖をさらに二ヵ月延長(八七年一二月以降ずっと)。

・キューバ、副大統領のシリア、イラン、リビア、チニジア訪問で「唯一の超大国に有利な現情勢に対し共同の重要性」で一致と発表。

・リクード、選舉名簿作りの党大会、党首選で三〇%占めたレビ派の排除から矛盾拡大。
・カダフイ氏、「われわれは彼らの無罪を確信」「米

国の選挙の切札になることを拒否する」。

三月三日

・パレスチナ代表団、暫定自治政府のため九月二九日に選挙実施など細部にわたる自治提案。

・ラビン、「私はPLO国家に反対」だが「パレスチナ人が独自の代表団を形成することを気にかけない」し「自治合意に達することは可能」「シヤミーの政策は金の無駄であり、安全上も必要」これは「米国を満足させるために言っているのではない」。

・リビア、国際法廷に米英の要求はモントリオール条約に違背して、主権の尊重をと提訴。

・リビア、國際法廷に米英の要求はモントリオール条約に違背して、主権の尊重をと提訴。

・西岸、ガザ、敵の強弾圧にもかかわらず人民の攻撃(アマルが声明)。

り、パレスチナ人と兵各一名死亡。

三月七日

・アンカラ、イスラエル大使館保安責任者が車爆弾で死亡。イスラム復讐機構が責任声明。保健相のオルメルトは「外交官は戦争の前線にいる。九人目であり、これはムサウイ師暗殺の直接的脅威ではない」と動搖抑えに必死。

・南部、イスラエル・SLA合同パトロールへの

攻撃(アマルが声明)。

・西岸、ガザ、敵の強弾圧にもかかわらず人民の攻撃(アマルが声明)。

●編集後記

二月二〇日のイスラエルの侵略行動に対しても、国連平和維持軍(UNIFIL)のフィーリー部隊は車両でバリケードを築いたり、国連軍の検問所で立ちはだかたりして、イスラエル軍の前進を阻止しようとした。敵はブルドーザーをも用いて、障害物を除去して侵攻した。

今回の侵略時に、UNIFILの七名が負傷し、その内の一人が後に死亡。UNIFILの七八八年創設以来一八五人目、フィーリー部隊では二五人の犠牲者(=死者)となつた。

「平和維持活動であつて、戦闘部隊ではないから『戦闘に巻き込まれない』などと詭弁を用いて」はこの事実をどう見るのだろうか?